

季刊せいてん no.136

●浄土真宗聖典の学習誌●

特集 深掘り歎異抄 その2

—『いつでも歎異抄』刊行記念—



江戸時代の庶民的な仏教書とお説教 / 近世中期の勸化本(二) 幸せてなんだろう / 鬼となった人間の現代
「恵信尼消息」 / 二月十日の手紙 「蓮如上人御一代記聞書」 / 自力心が諸悪の根源

安楽浄土あんらくじょうとにいたるひと 五濁悪世ごじよくあくせにかへりては

釈迦牟尼仏しやくかむにぶつのごとくにて 利益衆生りやくしゆじゆうはきはもなし

〔浄土和讃〕五六〇頁

（阿弥陀仏の浄土に往生した人は、さまざまな濁りと悪に満ちた世に還り来て、釈尊と同一ようにご一緒でもすべてのものを救うのである。）

私がいまお預かりしているお寺に入寺してから、今年でちょうど十年になります。振り返れば、これまで多くの出あいがありました。小さい頃から育てくださった実家のお寺のご門徒さま、新しい環境で慣れない私を支えてくださった入寺先のご門徒さま、恩師や法友、そして家族……。今こうしてお念仏に出あわせていただくまでに、数え切れない方々からのお育てを賜って

きました。しかし、お釈迦さまが「愛別離苦」の道理を示されたように、出あいがあれば、必ず別れがやってきました。大切な方との別れは辛く悲しいことですが、近頃はお称えさせていただくお念仏の中に、先立って往かれた方々のおはたらきを感じるようになってきました。

浄土真宗では「南無（まかせよ）阿弥陀仏（われに）」という阿弥陀さま

と言っているシーンを目にしました。その場合の「仏」とは阿弥陀さまや薬師さまといった仏さまではなく、例外なく亡くなられた方を意味する用例です。しかし、本来は当然ながらそのような意味ではありません。親鸞聖人が尊敬された中国の善導大師は、

自覚・覚他・覚行窮満、これを名づけて仏となす。（七祖三〇一頁）

と仰っているように、「仏」とは自らがさとり（自覚）、他をさとらしめ（覚他）、そのはたらきがすべて窮満って満足している（覚行窮満）存在であると定義されています。浄土真宗における「仏」とは、あらゆる人をお念仏するように育てて、お浄土へと導いてくださる存在であるといえましょう。合わさらない手が合わさり、下がらない頭が下がり、愚痴や文句を言うこの口からお念仏が出てくださっている自身の姿を通して、先立って往かれますに仏となられた方々が阿弥陀さまと共に私をお浄土へと導くはたらきとなつて、ずっとご一緒してくださっている

のだと味わえます。「お浄土へと導くはたらき」と申しましたが、「はたらき」とはそもそも目に見えないものでもあります。しかし見えないからといって、存在しないということでもありません。「風」は見えませんが、木々の葉が揺れているところに風のはたらきを知ります。「重力」も見えませんが、モノが上から下に落ちていく様子を通して重力のはたらきを知ることができ

ます。先にお浄土へ往かれた懐かしい方々はたとえ姿が見えなくとも、私に仏法聴聞をすすめて、お念仏を称えさせていく「はたらき」となっています。瞬間も届いてくださっています。

親鸞聖人は、お浄土とは「無上涅槃の極果」(三〇七頁)という、この上のないさとりが実現される境界であると示されました。私たちはただ死んでいくのではなく、阿弥陀さまの願いに生かされ、お浄土へ生まれて仏に成らせていただくいのちでした。「仏に成る」とは、亡き方々が私をお浄土へと導いてくださっているように、私も

お浄土へと生まれたならばあらゆる方々のもとへ還り、お念仏とのご縁を結んでいく存在にならせていただくという事です。そのことを親鸞聖人はご和讃で、

安楽浄土あんらくじょうとにいたるひと
五濁悪世ごじよくあくせにかへりては
釈迦牟尼仏しやくかむにぶつのごとくにて
利益衆生りやくしゆじゆうはきはもなし

とお示しくございました。お念仏を仰ぐ人生には、たとえこの生涯を終えたとしても「死では終わらない」という、いのちへのまなざしが与えられていきます。さとりへと向かうための能力など何ひとつ持ちえない私に向かって阿弥陀さまは、「あなたをかならずお浄土へと生まれさせて、仏にさせましょう」と、「南無阿弥陀仏」の言葉となつて私に喚び続けてくださっています。お念仏を申しつつお浄土へと導かれて行く人生は、阿弥陀さまに護られ、無数の先立って往かれた方々のはたらきによって支えられています。